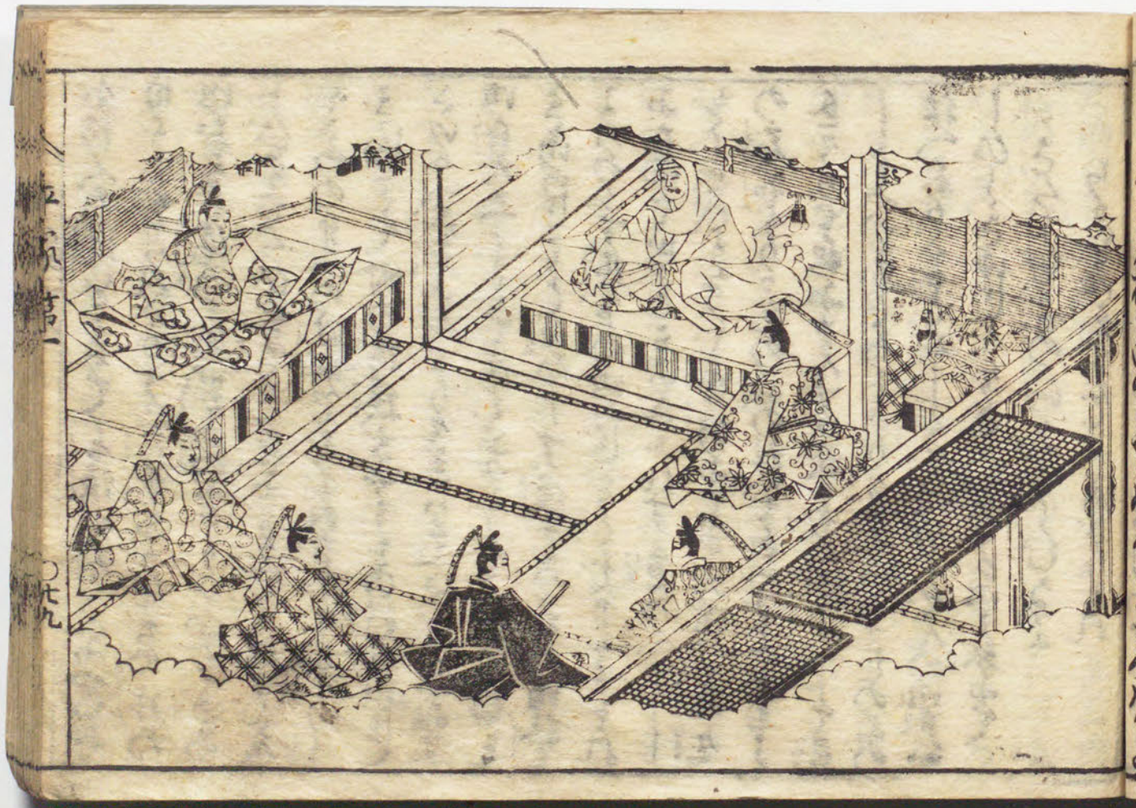
みて中の御つとゐへ御おもむきにのゝくま姫
河の名にふてしちり〳〵の言葉ひく申さる右兵衛
安たり。殿下と中ふあ〳〵あるそて前渡より
てる所を時とぞつとて似なるきんぐ御返身
たかしかなとくくまてしもやうすくもくるとお
そらふ近りもとごろふ近つめ。ちふ〳〵ふつまくて
申しつゝ向路りくらりとらるろ清あ十人のうち。
たの若生くをりしかりぐつゝとをとられて
ぐりぞゆかにおる人のもまてるのりがりなどり
と切とてそはめぐりしぶつとちふべりしずでの
りくりとゑへしとぞひふくめてそ切てぐる。
千渡ハ御車の内へとらの〳〵ゆきへなどし
てずされけるぐりおらし。御よめむるかひきり
くみらくくさんぐふゑらし〳〵悦びの時を
はくりちりくへゆりあさまいぱへる神あるり
とぞ言ひりるさま一九御車ぞひふゆかるがハ
のふいつりひる稀の本久丸と云おのこ下らう
あまて升さりぐしさ若ふて御車ともつ
ひ無あをもまて。中の御つの御前へまづ御見えし

まりぞそくらいの御神ふて御洞などおさへさせ
給へば。是ぞ御のふしぎさ深ましさがしと申く
ありける。大職冠鎌足公の御すゑハ。御まもそ中ふ
なずおば。右大臣公時宮ぶより出たる。橋路寛子の
うへに御めぐふおりをかくるすゞまて成りなりず。
されぞ平家の悪行の始なると。ふ相友にけ
と実検て右ふ出まさらけれなり。そを時行見ふ
うる行たつる勘當をしる。ひとハへあいりする
ふしぎそとがしうつたるゞ宝鑑ふ蔵け
ありをざりつゝそ九ハすをと為さくらいせ。
きんぐんハ三條よりおり。しとりそあてしられ
先ふた五ふるかんずる者がだハ礼義なる
知しててそふつまにへこふれるのひろう
とがんじて。乃後の悪名とぞ。ふ来るのあり
御ひとりふるくりとてあつつくいもの出へ
物ひりさるされバけるなるとハ。あるを後も清
りんこころとぞなかりし
▲あつり言のる
若御渡てまつ上御元服の御定め。そ日ハ 右 姫



二百人の侍どもにて主従のたいめんありとぞ
目をかけられたりける太政大臣にかしこまりける将の
けふある橋の出へ男山の方よりかへり
とびあそらひ宿してそれにのる鶴は八まんの
御子の第一の伏たちからちるふりそそかし
ぎぬよと時の相模守かさをいはぬけれはし
ざりへ参宮にかかりけるがそこそるにかくす。
けんろくべしとて神をなかして此白き。馬をも
さけつかしことぼひ申す。假名も八幡の御宝殿に
よのわかす陰下の御つかしこくぞやうられ
に太刀をも出まもにくされず。重ハ人あめし
ぞまるべからく宮おかもて中の島丸
の前にかりてとのとの社へ出てつきて参る
まかりて出かけんずる社前にて向して参る
しらにかまどろこかりける宮にかからとの上の
社へ来りるとおしくて御かうてんの御宝を
しひしさゆしうろくとむるけしきにて
さらしむかりのかせうしむるよ
ちかくとへえてとどめざりける

太刀をもそれ出でまでもいふされずかのよの
社の御宝殿の御廊なる松の枝にかけさんどころ
ありけるところにて此中の陰と百日が間をる
見えけるにあり時霊なるさくらり雷神ひき
ありけるとは太政に落かかり雷火かしよぞ。
宮中すでにあやうくなりしかるところへ光り
つきわたりてそとをみる桜の御神体ひかる
おもとあらひ出さんとする所前社に百日さんろう
のんぜしめてそのなかに百日にあたる宮へお
ましとて御ずいしん社家より大内へそうもん
申されまゐらすなはちまかりさんとす奏聞せしむ
さるを時神人あつまりさりてその御宝の
うちがとおしまして一条の右大臣より勅使
らてある神のひもいと受けずしてそのやに
は太刀をひふんのちあるといのり申されあまた
みやこのうちへもでこらむりける宮の叙
位だりくとや院内のけそうろひなあらし
ず。桜の宮居の御せいぐいなもとめずして一
向宗のまくらにてあまねく渡る花山の

そるが。はおおこらまこりそるあいじとかり
ぎぬの袖ふりをそ。門さとされこりそるを。
法皇をゑいらんあてあまいいるゆと作れば。
大納言立ゆて。平氏こふまいぬとゆされる。
法皇をゑつがふ人をおりしまし。老尼まて
さうがく信まと作るまゐ。平家のおかうはよ。
はと来てあくあまりふ平氏のおかうはよ。
りてゑひてはとゆす後宮そうづ叔それと
ぐいうぐ仕るべきゆらん西光はしらぐそとれ
ふはおうじとてついしのそとれてぞ入ふる。
法皇あまりの浅ましさふはやく物をゆ
さまずうへすぐ思ろしうりしるまなり。
叔よりこの案されくぞ。をはの中ね入さ基
澤。信名なりまさ。法性ちの執行後宮そう
づ。山城のおりしうぬ或中の大備まさつる。平家
なゆすより。こふ家の小姫さ。新家をすを行。
ぶしふは毎日の花人ゆきつるを始としく。
小面の老尼おかく与力おてぐり

▲粉河のきんのる

格は法性ちの執行後宮信頼とゆは。東格
の源大納言が志ゆんつの孫。本ちの法皇くらん
がふはる也なりそぶ大納言はさしてこうそとる
家ふはあしゆ。大雅ふくしあしさ人ふて。こ
条の坊つ京格の高所のおとゞ人とを安
く過されず。きこはゆつふこずこくとくひ
志げり。怒てこそおりしなまゞるおそろし
さ人のまごなまゞかや。は後宮を信頼な
まそ。ふこけくおごまる人ふてよしなきむ
かんふを組してぐるふこそ。新大納言如親
のつぐごの花人行つるを言てと安山辺とゞ。
二方の大将ふ新むせはるまおかをこる物な
らば。西とを店をとを所ちふよりづし。先ゆ
袋のまこうふこそ白布あすこんさられこり。
安元三年三月十五日の日。西光院及大臣
ふてんじ給てりかりふふ相及。源大納言さこ
ふさのつをとこそ。内大臣ふ如うふ。新て大宮
行りる。大臣の大将めでこうりさそる若ふは大将
の此つの右大臣つゆむねこそそゆのしこのうえ

日七月九日の日の暑ぎこゝに。日代師御が鈹
をう社をしらをさまぬ。ふかの日暑ぬ。おけの
軍と言ひて。ま日はらをでこゝへさり。夢吟
むすふ社風はいむもの神をひろがへし。夢ゐ
をてしれいるづまは甲のかしとうやうれ。日
代うるりどやしひうん。穀ふげふして高く
のがる。明る卯の刻ふとしらをそ。時をどろ
とぞ休ひうろ。城の西ふはとゝもをぶ人
とのてゝをうれば。皆落ていしゝ中す。ちれ
力ねがて引しりぞくさしば。山口へ祈へんとて。
白山中宮の神よりざりをまてひえいの山へふり
上をなり。日代月十二日午の刻中。白山中宮の神
よ。流ふひえい山本坂りとふ付をうふと中程
とそうれ。小西の方より夏おびたしく
るつて。都をさしてなりのがり。白雲くぶ河
て地をうづミ。山上洛中をしるへてとれりの
山の横まで皆しろこへふぞ。此ふかろ。ちれ
神よをぶましふとの高へのをうましふとく
中すは。白山めらつと行況ふてぬかしますや

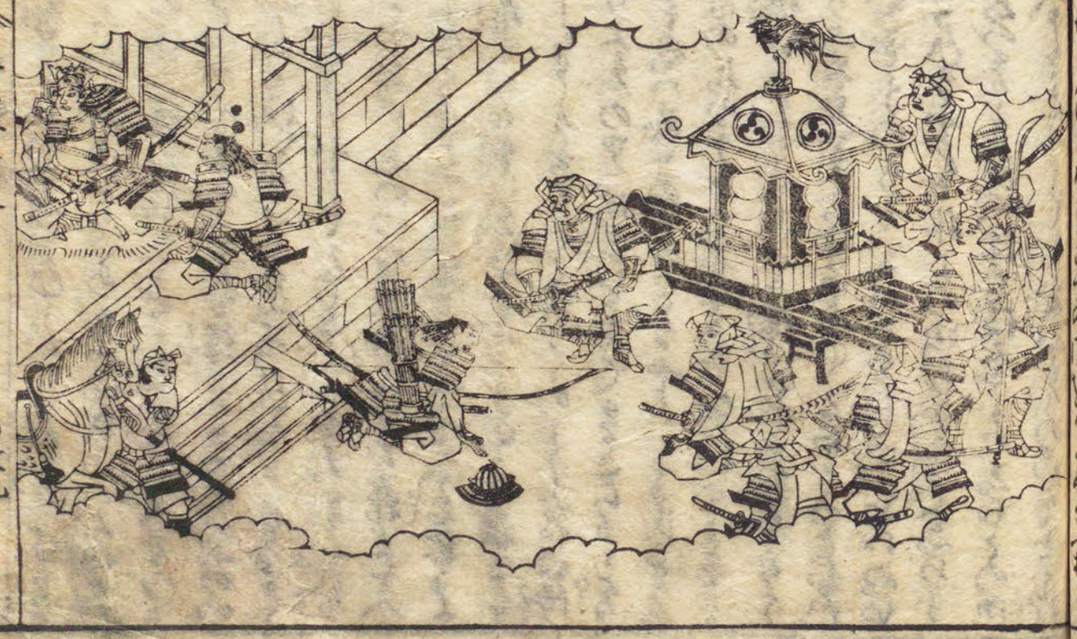
をば子の御中なり。先さこのしやうぶ
しらず。まおの御ひろこびこゝはなりあり。
浦海が子の七世の孫ふあつりしふもすれ。
洛西の老のすやうぎんの子をんしふもこし
ひりこゝの志中しらびすとつぎ。七社の神人
神をつし祭て。時しこくくのかつをさひん
ふ流ふ河のるもふてぞいろう。ち行ふ山
口のちれ。西日ぐのち師ふるとふざいふもよ
をしまし。日代を夜お皮師御をさんごくを
らうづさ中そうりん家しふぬしいへ。ゆさい
さよりもなりうまば。しうるづさ。ちの夜よ人
ち。ちれまこくしてゆさいぶんうづさものを。
書よりふ口のそをうは。他ふことなり。ちれ
の屋ざいの程のそつ。豪仲の名はさしも
鈴鹿ふてうしんさりしかた。山口のそをう
よりて。あざいをしれうひふさいくんや師
ふるなどいるの程ふてやはうづさ。この田ふや
ぬふづさしやあはまうまた。ちはいろくとお
りんじていさめず。ふ浦はつこふ恐まてゆさ

ずとぞうけたまはれ。とのくに口をとらえたり

▲ぐりんさそのる

うを河のあすぐ志のさい。山法師そぞうれ
んにうなくね物し。白河院も作なりけるとや。
鳥羽院の御時も。鹿野の平泉ちをぶしへ
ながらまゐるなり。南山と御さ恵清うしぐるに
よりてなり。ひとりつく。まとにしく高下をれ
てこそ院宣とばかりきれけれ。さまばかうそう
こそやうやうの事されし。山門の大衆日吉の
神よとぢんとうへふりまて。物語と鼓さばかれ
いぐれ申ひ御ぐさとやされければ法皇ばかに
も山門の物語をかぐしがくしとぞ作なり。澄し
かわうこ。三月ラの日。尺のもち源の義經
物語。南無神まうの座とうとすろ。山門
くぢうまや。ふんあうをせつがいす。そにおうて
日吉の社司。延暦ちの寺衆つぶふこそよ命
文とさしをて。御所へ来じうると。後二条の家
白衣やまと源氏中務の様の御輔よりうるに
御て。そと房がとうりしに。御まえがううしに

と敬つ。夫座にいころさうに。八人さずと家
ゐ者十よ人。社司諸司。皆勇へうなぎまぬこれ
に依て山門の上總ら。子細とそうしんのたに。殺
まうを。御すくゆのくらばぶしんひ。西坂本に
御向て。ぎな遣うへす。去程に山門にはぶさいぐん
ちこの事。日吉の神よと。根本中中へふりあぎ
をもり。まゐおおて。しんどくの大役ぞと。七日よ
見えく。後二条の宮白衣とおもそしをうそう
ぐりんのぐうしには。仲胤法印ぞ時はいまぐ仲
胤ぐぶとやしがき。対に上りぐ。ひ打なし。
かいびやくのとうばに云。和しがなさ。の二条よ
まおりしそかひし。神さら。後二条の宮白
衣にかぶ矢一門をなちあてうへ。八大まな
ぐんぐんとぞうしうにそさきいちうりけれ
ぞ。衣鞋てうしぎのるまきうり。八まなの御
なよりかぶし矢のおもあて。王城とさしてなり
て。行とぞ。人の義にはしてうりけるまゐ。物宮白
衣の御所の御うしとあをしうしに。呂今山よ
まとりてこそうりうるやうに。家にぬまとるも



ぐ大勢の事どもかゆゆりてこそ後代のやすし
をわらんずまでなんづく此新殿のやはち孫まよ
つもけるこ源中ちやくくの一流ろ矢を知ても
いまぐこまふくとやすずおうそはふぎいかもう
ざしすぞ。あはれ此又御まする男なり。一とせ
を来の涙は左位の内時さうざの法をもし
に源山の死と云訳とおさまたりなるにて
こなよこなぐくはれたりしと新殿
こやまはのもこずまとはんてざしし
さてくは死にあらはれにかり
と云えて所住て此かんにあづかりし程のやさ
男にいかで時にのそんて情なうち辱とは与
ぐさ只神よりはくしたまはやしきんざしさ
つまはまは数十人の大れ先祖より後祖まで。
たしとそ同じなる掃神よりさうへしなり事
のぢんとう待望つよりへなりんとしなるに狼
藉ぢに出来てふしたこんぐにいてそまつる。
十禅寺の法うしに此矢たあまさいてそなり。
神人を仕いころさまにしまりと多くさずと彼

けて嘆きさきなふたうは攪天まそくをさこ
なんらう地神をおくろこ法しんとそ見て
なる。大れ神よりとばぢんとうにありすてこそ
まつり。なくくなにへぞうりなる

▲ざりえんしやうのる

ゆゆべにおよんで。死人の左が弁ひとつに神
て。涙の為にて縁にはやきんざるなり。去
ぬる保安四年四月に神よ入洛の時はざすに
御て右山の社へ入なる。又保安四年七月に神
よ入洛の時はざとんの分当に御てざとんの
社へ入なりしと知を保安のまいうべしと
てざとんの面当指大僧都てうたんに御をへ
いたりくにはんでざとんの社へ入なる神よ
にこの所の矢とは神人して元をぬかをしる
まさりこの大れ神よりと御所へ入りなるは。
去ぬる永久よりはくに法祖まそはたる知なり。
さまた毎年にぶしに御てふをがをらるに。
神よいなるるはもくじめてぞ取る。其神は
うりとなるとはさいかいらまたにふつといへり。

ないまで。西国がのちりろうとぞつくりんを
らまでおりりのいと田へながさうしおとこ。こん
どうお皮りろつくとばさんごくをしる。又去
ぬる十三日。祇よいてそまつしぶし大人ごくじ
やうをしる。そらハふなかれ皮の得るり。日さ
廿八日の夜のいぬのこく。ひぐちとこの小路
より出お来て。京中おかくゆきにふり。おり
ふしろこの風をもしくふさくまばたるす
志やつもんのごとくなるかわかが三町五町と
つぶそく鏡のうへ。すぢうへにとびこくゆけ
行ハ。おそろしなどもおろうるり。あるひハぐ
へい親王の子種皮。あるひハ和のく天神のこう
ぐい皮。猶いつきいのくいまつ皮。おふ皮ゑるれ皮
うもの皮。とうこ三条ふ西つぎの大臣のうん
みん皮。をうぎんこのかりの皮。こまをうじめ
てひしいまの名和こ子ゑう和。こつの家ぐふ
を十ちうおまでゆきにふり。ゑ上人。
法大夫の家しハ志るすにおよがずそてハ大
内にふきつきて。志西しやくりんよりうじめて。

おうてんつぐらいしやうつ。たくでん。ぶくぶ
志よし八をう。おいさん和。一時がうちにふこな
くさいぢんの地とぞ。ゆふかる。家しの日紀代
くのりん志よぜちん。万がうさながくちり
くいくなりぬこあひごのほかへいかがりぞ。
人のやきを志ぬるす十百人。ぎうぞのこぐひか
ずを志しずそこぐるすにあしずこ。ふまのは
とがめとて。志いふ。ふりたさなる猿丸が。二
こまおりくぐり。まこふこいまつをとりひく。
京中とゆくとぞ。人の夢に見てこりかる。大
こく皮ハ清和天皇の御宮。でうぐりん十八日
にんじめてゆきこりかまハおなじさ十九日
正月三日の日。やうをい浜の御そくわハぶくく
みんにてぞうきもるぐりんかいえ。四月九日
の日るくじめうて。日さ二日十月八日の日
ぞはくり出されこりかり。後まんをい浜の御
う。天ぎ五日二月廿六日又ゆきにかりち
ゑやく四日八月十二日ふるりじめそこし。
いまぐはくりをおされずして。後まんをい浜

わくさよみりぬ浄ご三条の院の西ら近久
ほ正月ニ日ニはくりおさきて文人給
とそそもつ作人ぐとそうしてぜんう
なしそてまつ宮は世すなふなりて君の
ちうしとなるみとくろくとまえぞ涙にすふ
はくらまん

平家物語第一終

平家物語巻七第二目録　並大さと

▲初丁 ざすながしのまき
平家ぢやうえん三月五日てんだいざすめいうんそうじやう
がざんぐんふたてんだいの上ニみがさかりんの申と
たまはりざんさうまとおもひぬさすとみち
まふくするとのとこ

▲七丁 二 ぜんさうわたゆりのまき
平家つぎさうおしやりハざうのぐんそうの法ちそう
うちびしつのつくみてあがされしとゆとりするうて
なとら

▲七丁 さいくわうぐさきれのまき
平家さいくわうあくござゆくゆきすかのみくらりん
とざんしそりけわ平家ふみさいしてびりんのやうら
こびのらんとぐろりたゆそてうそやとしまぬざいえ
かいハちうざうのあく人の首ニて。つうきうしるうし
とのをとら

▲十二丁 ゆきらうらんのまき
平家新たるみごんなりちくとぜいふぐうなぞうの事
まてびろくとあとうづりしわうて西よおりちうささ
なおぞうへつびとしてうりらうのしぞいとあぞさ
まつりしとしらせり

十八丁 ▲ かねこひうをのる

本文なりちかひかんよろてぞよかねなりつ。
とこしへてこしかんよしかぐうのさまひしとのり
りこひうをてかねとあづしかしよしちかをり

十九丁 ▲ ちうくんのる

本文ごいじゃうのへぐうむかん人あまさきとりぞの
うへはまうとなかしなかぐさよしぞ下さうどう
すりとぞもどりゆかりのてぞのりとくなりしぞこ
いさめかふうしとしかをり

二十丁 ▲ かうくりのる

本文ゆまつ及ちくかぐうをいさとてかつりさあひ
法分のくんぞいとをきこをまいぞ下さうあつまる
そのうさゆまつ及出かひぐまつをあんづくよまい
ふよしとかくしまいよゆうまうのかうくれをと
てぐんぞいとうつもしこくとしかふるとしかけ

二十一丁 ▲ 新大なごんながされのる

本文しんちなごんなりちかぞいよをとるかぐ
こをぞかまつ及ゆうくよちくよびとしてびせんの
こじまへながさるしよしをのをさり

二十二丁 ▲ あこやのまつのる

本文ひかんのとうふいあまさ法くうへなかる
以よなりちのよぞなりつひとびつちうへながしぞの
おのたくよあづもしかぞはなりちかとびぞんより
びつちうへうつさかしかまいふしのろかとをたゆへ
なりつひかいかかどやぞのあよとかれし時ぞの
おそよりちのそいあつぱとをさよしいつりし
かぐなりつひふしんしぞあこやのまつのさくとり
あくよしをのぐさり

二十三丁 ▲ 新大なごんあさよのる

本文しんちなごんなりちかぞいしよふてしゆうを
をしかぞふさとうりのぐしぞのつひとして
文れりちかぐかしちなごんへくさしかまいぞをくす
とさあつりてのぐしハ京へかつりぬぞ後なりちか
ちうをしれしかぞてこうくのぞさけなさす
どもとしかをり

二十四丁 ▲ とくごいじいつくしまゆうぞのる

本文とくごいじのしつていぞ京のじゃんよちやう
をこうらまてしゆけをんとのさまひしとぞくんん
どいさめていつくしまゆうぞとくじめしかぞしこ
さくうりとくぞさよりりはうしさくうのてくうり
こくハしてぞとくごいじをんじてぞしやうとさう
をかふうしとしかけ

二十五丁 ▲ さんりんめつぞうのる

本文はまうこうのこうしんそうじやうとをぐし。

[illegible]

▲ぜんくわじえんしやうのる

[illegible]

▲やすよりのつとのる

[illegible]

▲そとはながしのる

[illegible]

▲そぶがる

[illegible]

平家物語卷第二

▲座主ながしのる

治承元年六月六日の日天台ざすの明雲大僧正五禮とらやうじせらるゝ元人と申供にて。如意輪のおそるを召うへひて。御祈禱と設るをしる。[illegible]

[illegible]

[illegible]

大の責に行ひなべき也中の事にて大きな
れさんらくすと申しかば事中又さらざらへ
里閭さ十八日太政大臣いまの云ひ十三人さん
ざいして洋の庭につきおのざす飛科のる
俄に三ヶ八葉の中納言も方々に付いまぐ
大弁の宰相にて東庭に行ひ出るがすこと
出て申されけるは清盛のかん恢にまりまて
ざいしてとうとがんじて大宮流をしるべしとは
えて以て御ざす明堂大僧正はかんこうかん
がしておやうぎこうらつのうへ大乗の御
とる事にさづきをなり御さつ志やうかいと清盛
にてをさをなりけるやうの師はいの師を
科に行ひまんなれ宮のきうらん者をうらし
がんぞくを流と言ひあらるべきうて憚る和
もなうやされたりけれ是ざうぎの云ひ皆も
方の事に同ずとやあり是を清盛は
さどとり源りければ打どんなにもらる。
太政の入道をぴるやさんとて流氣をしれて
里なれ是清盛は風のまとにて出るべしと云ひ

給ひ〇ばかりなるをにて西方をつく僧をつく
すなるひとて家嫁と名ゑしを僧をさせ
里大納言のさ中に家内の相校と云ぞく名を
こそ付られければ明堂とやはこまをまくを
乗く村上天皇第七の皇子ぞ年親王より
大代の御末おのの大納言あきこちの宮の御子
なり誠にぶさうの頂流天下第一のうる僧に
ておりしければ家を清盛もそるべし清て天皇
大ゆうしのお面をもつきをくりさまを清盛
の御わべの中す親がやうなれさばかりの智者
の明堂と名のりかふこそ行ひ上にハ日月
若光をなるべしにかきうらしぞなんじける。
仁安元年二月廿日の日天台ざすに成をかふ。
同三月十六日御なきまるゆきの宣旨とひ
らかれけるに稱ぐの宣旨の中に方一人の
ところにおろい布にてつまれたり一生にかん
のざすはこととわきてしんかふにまうしに事
なり文一事をあり僧教大師見ていのざすの名
字をかくてあるし事をさり我名のなかまま

そうしきなまいさうなうれをしんるまうこが
こし。今は山王大師の御力の御文粗こをもう方
なし。後ふ家の志さいなく 私えをもうべくは。家
にて先一門のすいさうとこせしめうべしとぞ僧
たちんさんとくぐらく行念しまり。家ふ十四
ちの法師せうえん律師が召つかひなるつる丸
と云童をこ生ひ十八さいふ成なるが。心勇と言
めあさいに汗とながひて僧ふくるひおさり。家
十様じごんがんの案ぬさをうつり。末代と云た
いそう我山のくりん志也とは。他事へはうさるべ
き。生ゝ世ゝふんうしさしんふ私ては家は林屋
ふ給とゝゝめて色何ふかはきんとてさうの袖と
かはふ押あてぐ。ぢめぐくとなさはまは。大れこれ
とあやしこそ。後ふ十様じごんがんの御さくせ
んにておりしまさば。我しきうしとあらきん。
てふりの重ふ色しかへとて。ぞ僧は四六百
人ゆゝふ持たる志也ずたす十様じごんがんの
大屋のうへでなぎとてうかの袖ぐるひくしり
まりりひろひあつめてすこしもうがへず。つくふ

見なりとの重ふそくりなる大れ神明の
まいがんわしこ成事の考さふ皆さなごこ
ろと宮てすいさのかんあいとぞ僧しまる。
主義なるは行向てうがひとくめをれ也と云
程とそあるをまごんかの如ふとつかうす。或は
志が唐崎の演ぢふ。わ也こ浦ぐなる大れも
あこ或は山田ゆりその御ちふ。母とし出す志也
とも有こ元とこそさしも呼ぶしをなりつる。
おつ立のうつしあそうじちりぐふこなふを
さりぬ大れ高分ちへまり向ふをんさすまさ
ふおどろかをかひて凡そ勅かんの者は月日
の光ふぐふあたらすと社家まこいるふいりんや
時刻とめぐらさず。志さおひりさるべしと。
僧意こ名の成るふ。かを也すらふべかず。れ
流とうくゆりよりかかべしとぞしとくね
おて言ひなるは。三台くらいりんの家を出て。
明ゆうかいの志ふ入しよりけるぞひろく志ん
志うの家法とぞしして。我家あるふを呼び
こさぐ我山のこうなうとのこ思へり。の也

のごとくすまゝにしてをんざしなりはまとりぶ
ゑ日本ぶさうのまいら。結ごこ西海のごう
坊。山王の御のえさうんにして。沿法まほご
うくせさまはしゆしのいしゆふ西のまぞなう
ひなくいゆしさ法師原まぞも世紀てうゑ
めず。洗やちゑうこうにして。こゑのしゆしの
黄そこうり西行おりして。一山の和尚こう
福なくしてつゝと勤りかゝる。山上法中
のいきごとり。真教室城のあざまりよ
わずやけ時和尚なんこつのまゝと生るつて。
すゝいの学侶なぐくないをつのつゝめ。若ん
るんうるべしをんずる和ゆうない法華なり
称をしれ。さんごくあざいさもなびかうへとは
称まんる。今生の面目めいどの名あ成じ
とてさうゞんより。洞とゝくと流しなれ
ば。粮子の大衆も法をもとゝぞ同じなる
そまよりしてこそゆうないとばいかめ原とは
いたれなまこ手子ゑ名いつゝしとば時の
人ないかめがうとぞ申なる

▲一行あじやつものな

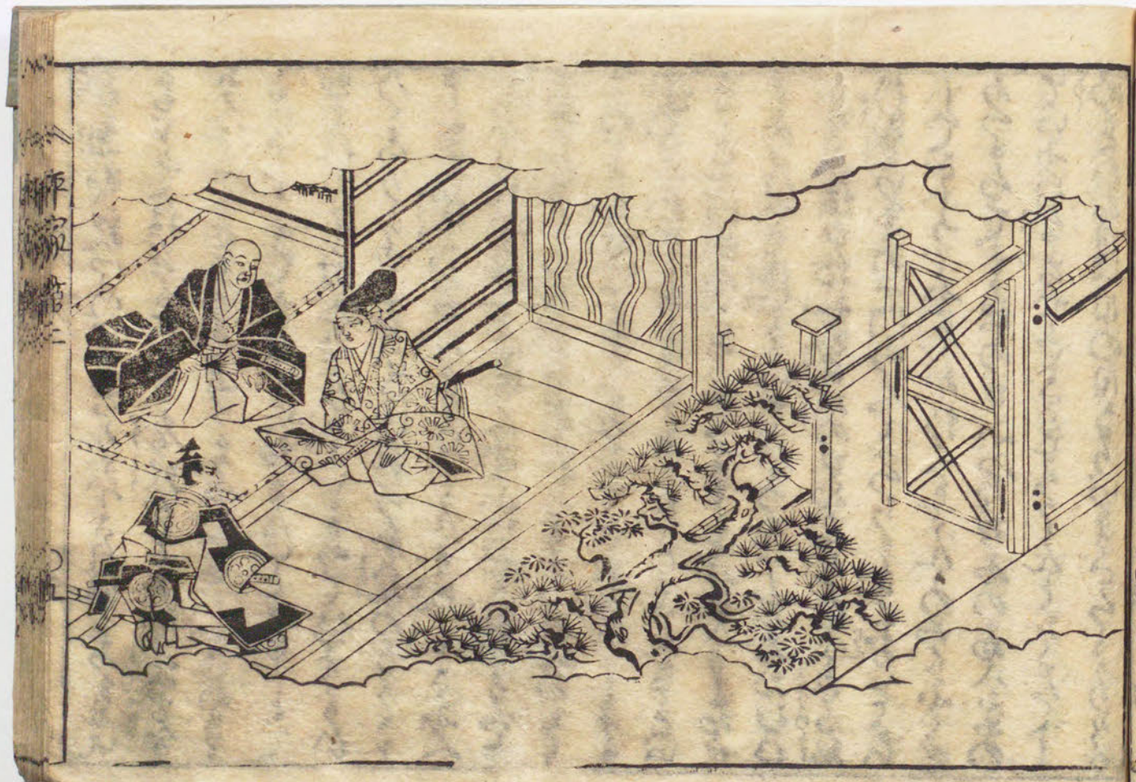
大衆せんざすとば。東陸の西谷。めさえ塩に
ゐまる。時のまうざいとば。桓死の人もまぬか
まかはざりなるかや。若りつゝしの一行あじ
ゆりは。云ふ皇帝の御ぢそうにておりし
なるが。云ふの后ゆうこひふんをまうつ。
帝も今も大西も中西も人の口のさがなさ
る。諸ゑこもなさるなしかたま。類ひふ法で。
くりし西へ流さまさをかふぐざんの西へは。
のはるこゞもんちはとて。ゆうゆうちはとて
ざう人の西へ。あんなつはとて。生料の
志をまずはるりさまばかの一行あじゆりは。
祝の人なまばとて。あんなつはへぞきこれなる。
七日七夜がる。月日の光もなくずして。終ね。
こやうくとして人もなくこうかふをんど
まひ。おんくとして。ふかじこゞんこくま
鳥の一聲中にて。昔のぬまさねりしあへず。
まさるのつゝふかつて。幸流の生料と勤り
かふるをとまは。新まこうひて。九らうの祝

と現しつゝ行わざりをちりうゝ時に行
右のゆびとらひ切右の袖に入れようの氣と
うつさまなり。和尚あれにおもんごんのおもるさ
あれようのまんこしそなり

▲西光がこしれのる

其程に山つの大花をんざすれとくめをたる
る。法師は南都をいとゞ安かずおもはるゝ所に。
西光法しゆるゝは若より山つの大花はぐつ
うのこゞりがりしき所へ付るゝ。今にはじめ
ずとはゆるゝ。今あれは此ての所にるゝに
はよくゝ此れかひはゞ。そらと此いまし
めはりずれ。此後は世がうでもはまじとぞ
ゆるゝ。只今家男のそびうをんずるゝとも
かつりこず。山王大しの神輿にもたゞかず。
かゝうにゆてもんさんとるやましをるゝ。ざん
所は西をこゞろといつり。誠なるゝなさうらん
我かしんとすまた。杉の風光と被つまたや
明るゝしんとすまた。法師光とくしやす先。
かゝうのるとやゆべき。新大納言成親の口

いまだ。と語の人々に伝て法師も山王ちらずと
申しければ山つの大花さのまま地にはらまれ
てどうめいとこいかんとんを出まして内く
浪言に浪ひちる。花流をまきしかし
ばとんざすまたうの面若めう光傍にあは
しるゝが大花二ゝ所をとゆるゝひて又いるゝ
こゝめにかあふべきゆんとんがそがゆぞ
こゝひるゝさまたゝるゝのさゝはなりけり。
其程に新大納言は山つのさうどうに依て
私の宿をとばしくおさへらまたりそも
内裏まゐらるゝは様くなりまゐらせ。弟勢はかりで
は係なるゝふべし先見てざりをまゐばさしを取
まゐりつるゝこゝの花人行つるはるゝむかくせを
ゐふんや付にかん。ら袋のまうゆとてこゝし
まゐりをる相先とばひてゝまゐ惟子にこちぬ
くを家の子所にまたゆさせつゝめ打まゐはて
いてゆゝりをるゝ。信平家のくんまゐやうする
をさまをこゝろに。当時さやすうをこゝおをが
こし。あはるりまゐる程なるは行つるまづ



していくめとふ。西光年よりあくそはさりなる
上がうりんはこひしかりなり。自怖罪の故にさ
をしまで、其後は口をとさせもとて口をとされば
家内の志しやうかして終ふさしれかなり。
嬉子かゞのも師ちうはかつくんをしれておりり
のいどこへ流さまこうしと。同志の侍人どくま
の新司これすへに伴て討をらう。汝男こんどう
おもりうつひとばごくより引出て誅をしう。
其弟たちの射りうひしに。汝ふこ人とも同う
以とくひらまかり。そしらはこなりひかひのき
其の事ていうやまじこさるとのこいろひ。
こぬこ白ざすあさいかまり初ひ果報やつさ
かなんぶ。主大師の弟がつ罪を討こそかかうふ
つくうふうれやかわつりなり

▲ふまつなうくんのる

新大納言はつるなるかぶどしこからまて汗
みにあつぐ。新主元は日法のあしまりしるのりれ
字しなるふしそこれりしぬんぞ。言てかやんの
かまのかかぞあるくんなんど。ぞりじるなう

おもじつきてあり。しなるかに後より見えとし
のさるうかしきまでは。すは只今秘義失ぐん
とて。武士たちの事にかしてとしかまをまぐ。
さはなくまてのあ板あるらうふしなし。
大納言のありしなり。後の清子とさろと引明
て出られたり。そなんの新の縦らうなるかに自給
大口ふくくこひしなづの刀どしくろまで
さすまうふ。所ていかかいかまうなしこさふく。
大納言とまりしかしまくて。柳川辺は平治かも
流ふ誅をしうべかりしと。四方が男かへて申
うもそとつぎをりしいかふ。私うふをとん
とままて。何のき痕あてか。南家かさぶらう
とはおかふなるぞ。逆とまうとりつて人とはふ
ぞどんとまりしぎるとばらく生ことていへされ
た。南家の軍乱いまだつさざるかふつく。そ
まぞはまへさんなり。日法のあしましのまぐい。
ぢさふ形しんとまへば大納言まつくさる
るはりずいかさまかも人の後ふかてぞはう
んぐくゆるはべしとまさまをまぐ。ゆる

いでゝ見て、志やうはいかゞの花人と、我はごとうの様
にかきを、我は志やうだりの様にかしむなて花
の様、まにまかまをつゝあはうらをつがかゝ
すしんを、花にはるしとぞ見しぜうりんとう
なまて、かゝりかゝぶれされたりてうそりや
とうきを志うさつゝをしりさしくがをうがは
んくはいかんしんかうしつ、花おはけはうそのお
居こゝ也、かたぶ人の様にふてくさくいのとぢ
をかくたがやうのるとやかぐさ彩太納言を
家身のかく如に付てを、子息母皮のかねなり
強いを、おさなれ老たのいかなりうれめにか
あふりんと、ひゆかにをおがつかしさいかり
あつさ六月に志やうぞくとぶにをくろ居
まず、あつさをこくがこなまば、狗をきさあくら
ぬらして、汗を洞をあしそひてぞ流まなりさ
つたに和女たる、石をなかしゞ抽ととれ忘れ
なまた、推してやべしたそして給ひず、お和の大臣
はまいの善地にさはさ給ひぬ人にてありしかれ
ば、今年に日さけて後ちやし様のすきかねこれ

如きと車のまりに乗つゝ、忘ぶ中の人語あらず
人百ぐして、宇ちたをば一人をくをつまず、誠
よ大ゆうもをにてありしたまば、入道と物をて。
一門の人々は名ハずもどにて見かひなり、大臣中
つの口にて、法車よりありかふ下へ、気強つと来
て、なぐ元祖の法大るに、宇ちたをば一人を、百
ぐをしれはいぬやしんとやきれば、大臣大るとは
天下のるとしていへ、やうの和なると大るとを
ゆうやあてと言へば、去仗とていしたりなり、
は、そゞろひてぞ見したりなり、其後大臣大納
言とばいづくに、まをたるゆしんと、変りしことは
あをくしたりに、武清子のうへにくりでゆふさ
なれありなゆしんとて明しまこたまば、大納て
おりしなり、泪にむきびろぶして、めをかんと給ひ
ず、いかにやと言へば、其時こつをまて、うれしぶに
忘れまこうりしさ、地ごくにて、花人たが地花
がこつとかんをまうしんを、かくやとそえて、気や。
何るにて、何やしんなさよりかゝぶうれめに、重
ね、扨まこしをかへば、さりたと社深うれをて